

名詞「かたわら」の文法化について  
——『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の調査による——

Grammaticalization of the Noun ‘Katawara’ in Modern Japanese:  
An Investigation of “The Corpus of Historical Japanese:  
Meiji / Taishō Era Series I Magazines”

劉 小 妹

LIU, Xiaomei

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要  
第49号 2020年3月 抜刷  
Journal of Humanities and Social Sciences  
Okayama University Vol.49 2020

## 名詞「かたわら」の文法化について

— 『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』の調査による—

### Grammaticalization of the Noun ‘Katawara’ in Modern Japanese: An Investigation of “The Corpus of Historical Japanese: Meiji / Taishō Era Series I Magazines”

劉 小 妹 LIU, Xiaomei

#### 1. はじめに

現代日本語では、「物、場所、人を中心とする周辺の場所」の意味を表す名詞としては、「そば」や「近く」を使うのがふつうであり、古めかしい感じのする「かたわら」はあまり使われない。現代語で「かたわら」が使用されるのは、多くは、「私はその後3年間、ゼロックスに勤めるかたわら、抵当流れになった物件を買うための技術を学び続けた。」（山田純男，戸田浩介『プロが教える競売不動産の上手な入手法』）のように、「あることを主として行うのと並行して別のことをする」という意味を表すときである。このような用法の「かたわら」は、空間的な意味を失っているだけでなく、ある種の従属節を構成する機能語として働いている。つまり、名詞から従属接続詞へと文法化している。

こうした従属接続詞化した例が見られるようになるのは明治以降であるが、当時はまだ空間的な意味を表す名詞としてもよく使われており、一方で、現代語の従属接続詞用法とほぼ同じような例もすでに現れているが、現代語にはないような用法や副詞用法も見られ、混沌としている。本稿では、『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』を利用して、近代語における「かたわら」の使用状況を幅広く観察し、それが現代語の「かたわら」の用法にどのようにつながっていったかを考察する。

#### 2. 先行研究

考察に先立ち、「かたわら」に関する先行研究として、日本語教育のために文型を記述した辞典であるグループ・ジャマシイ（1998）、品詞論の観点から「かたわら」を研究する村木新次郎（2005）、そして複合辞の観点から「かたわら」について研究する田中寛（2010）を取り上げる。

##### 2.1 グループ・ジャマシイ（1998）

日本語文型辞典としてのグループ・ジャマシイ（1998）では、「かたわら」について、以下のよう

に記述している。

## 1...かたわら<そば>

[Nのかたわら]

[V-るかたわら]

- (1) 母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた。
- (2) 楽しそうにおしゃべりしている田中さんのかたわらで、田中さんはしょぼりうつむいていた。

動作を表す名詞や動詞に付く。「…のそば」の意味で、情景描写に用いることが多い。物語などに用いられる書きことば的な表現。

## 2...かたわら「副次的動作」

[Nのかたわら]

[V-るかたわら]

- (1) その教授は、自分の専門の研究をするかたわら、好きな作家の翻訳をすることを趣味としている。
- (2) そのロック歌手は、演奏活動のかたわら、中高生向けの小説も書いているそうだ。
- (3) その年老いた職人は、本職の家具作りのかたわら、孫のために簡単な木のおもちゃを作ってやるのが楽しみだった。

「主な活動・作業以外の空いた時間に、一方で」という意味。書きことば的な表現。

(グループ・ジャマシイ 1998: 77-78)

グループ・ジャマシイ (1998) の記述から、現代語では、「かたわら」が「Nのかたわら」と「V-るかたわら」という連体成分を受けるときには、「～のそば」と「主な活動・作業以外の空いた時間に、副次的な動作を行う」という二つの意味があることがわかる。両者はともに書き言葉的な表現という文体的な特徴がある。

## 2.2 村木新次郎 (2005)

村木 (2005) は、連体節につながる形式が名詞ではないという矛盾する構造に注目し、典型的な名詞につながる節を「真性連体節」とするのに対し、そのような連体節を「擬似連体節」と命名した。そして、擬似連体節が名詞らしくない形式につながる構造として、少なくとも以下の2つのタイプがあることを指摘している。1つは「よう」「ほど」「くらい/ぐらい」「ため(に)」「とおり(に)」のようなもので、これらは、擬似連体節をうけるかたちで、形容詞相当節として働く。もう一つのタイプは、「かたわら」「あまり」「ついでに」「おかげで」「くせに」「わりに」といった形式であり、これらは、名詞(一部は副詞)から文法化したもので、擬似連体節を受けた形で、後続の節に対して、<時間><条件><原因・理由><目的>などをあらわす広義の連用節として働いているため、「従属接続詞」と命名されている。

村木 (2005) では、後者のタイプのうち、特に「かたわら」と「一方」を取り上げ、これらはも

ともとは空間を意味する名詞であるが、文法化がおこり、名詞離れた後置詞や従属接続詞としての用法がみとめられるとし、両者の従属接続詞用法について、従属節述語の形態論的カテゴリー（ヴォイス、アスペクト、テンス、肯定否定、丁寧さ、ムード）および統語論的カテゴリー（主語、時間的限定、空間的限定）の観点から以下のように記述している。

まず、形態論的なカテゴリーの観点から見ると、「かたわら」節と「一方」節の共通点として、ムード、丁寧さのカテゴリーを持たないことが挙げられる。相違点としては、「一方」節の動詞は「一サレー」「一サセー」「スル」「シタ」「シテイル」の語形を取ることができるが、「かたわら」節の動詞は「一サレー」「一サセー」「シテイル」の語形を取ることは稀で、基本的に「スル」の語形を取る。つまり、「一方」節はヴォイス、アスペクト、テンス、肯否のカテゴリーをも持つのに対し、「かたわら」節はヴォイス、アスペクトのカテゴリーが希薄で、テンス、肯否のカテゴリーを持たない。

次に、統語論的なカテゴリーの観点から見ると、「かたわら」節の主語はつねに動作主で、固有の空間的な限定をうけることはあるが、固有の主語や特定の時間の限定をうけることはないが、「一方」節の主語は動作主でなくてもよく、固有の主語や固有の時間の限定をうけることができることが挙げられる。

さらに、「一方（で）」節に比べ、「かたわら」節では、動詞は人間の行為にかぎられ、「農林業を営む～」「ワインスクールで教える～」など、職業を中心に、生計に関係したものに限定されている。それらは持続的な性質を持って、意志動詞に属するものばかりであると指摘されている。

### 2.3 田中寛 (2010)

田中 (2010) は、接続と文末叙述に使われる複合辞を類型的・類義的な観点から整理している。その第2部では、文型研究の視点から、副詞相の諸相をテーマに特徴的な言語現象とその表現形式をとりあげている。そこでは、レバ条件節の意味構造、連体節の接続機能、また瞬間を表す時間節について考察し、その第2章では、「理由で」「代わりに」「反面」など、連体修飾構造が文法的な形式に拡張し、従属的な接続成分に参与して、複文をなすものについて考察を行っている。田中は、形態的な特徴により、それらを「N デ節」「N 二節」「N（無格）節」の三種類にわけ、それぞれの類について、被修飾名詞につきそう格の態様（デ格、二格、無格など）に注意しながら、前文と後文の意味的な関係について詳しく考察している。

「N デ節」の類については、姿勢や状況を表す「調子で」「素振りで」「つもりで」「一心で」「思いで」「理由で」「目的で」「疑いで」「かどで」「関係で」「点で」「形で」「方向で」などの意味と用法を、「N 二節」の類については、「以上に」「以上は」「ついで（に）」「代わり（に）」「通り（に）」「わりに（は）」「くせに」「証拠に」「しるしに」などの意味と用法を、「N（無格）節」の類については、「一方（で）」「他方（で）」の意味と用法を、「反面」「半面」「一面」「他面」の意味と用法、「かたわら」「がてら」「かたがた」などの意味と用法を記述した。

田中（2010）の記述によれば、現代日本語では、「かたわら」節の前件では本業を述べるが、後件では副業的な作業、趣味、活動を表すとされている。その場合、「かたわら」は「をかねて」という兼務の意味を表し、「かたわら」節の名詞は営む対象としての職業を示し、動詞は仕事や業務に付随する行為を示す。

一方、職業、仕事、業務以外の内容については、「「?? 私は食事をする傍ら、テレビを見ている」のような例ではナガラ節を用いるべきもので、むしろ異種主体による「私が食事をする傍らで、妻が煎餅をかじっている」のような場所的な空間関係として解釈される」と指摘している。

また、村木と同じように、田中も、類義表現の「かたわら」と「一方」を比較し、「一方」では、対照的、対比的な状況が表されるが、「かたわら」には主従的な意味合いが強く出されるという。

以上に見た三者の記述は、大部分において共通するが、重要な点で異なりも見られる。ジャマシイや田中は、「母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた。」「私が食事をする傍らで、妻が煎餅をかじっている」のような、異主語で、で格をとる「かたわら」の用法を指摘しているが、村木は、これを認めていない<sup>1</sup>。村木が従属接続詞としているものは、職業を中心に、生計に関係したもののみである。こうした空間的な意味を残し、かつ従属接続詞化しているものは現代語の用例の中に確実に存在するが、村木がこれを取り上げないのは、従属接続詞への文法化が不十分な段階の用法と見ているからであろうか。しかし、このような中間的な用法に注目することは、文法化のプロセスを考えるうえで重要であろう。

### 3. 近世までの「かたわら」の使用状況

近代の状況を見る前に、辞典類の記述を参考にして、奈良時代から室町時代までの「かたわら」の使用の状況について概観しておく。用例は、項目ごとに最も古い1例のみをあげる。

『日本国語大辞典』では、「かたわら」の語義について、次のように説明している。

#### 【一】(名)

①物の横側。物の脇。

日本書紀「720」神代上（水戸本訓）「彼の大蛇、頭毎に各の石松（いはほまつ）有り。両の脇（カタハラ）に山有（な）れり」

②物や人のそば近くの所。何かに近接した所。

宇津保物語〔970～999頃〕蔵開上「宮のつい並び給へば、花のかたはらのときは木のやうに見え給ふこそ」

<sup>1</sup> 村木（2012）では、そうした例はきわめて稀で、孤例として処理している。そもそも、で格をとるものを従属接続詞として取り上げていない。

③そばにいる人。周りの人。

紫式部日記〔1010頃か〕消息文「色めかしくあだあだしけれど、本性（ほんじゃう）の、人から癖なく、かたはらのため見えにくきませずだになりぬれば」

④何かの、はしに片よった所。通路や道路などはし。道わき。みちばた。

枕草子〔10C終〕一二〇・正月に寺にこもりたるは「わがのぼるは、いとあやふくおほえて、かたはらに寄りて、高欄おさへなどして行くものを」

⑤都市などの中心から離れたへんびな所。人目につかないように片隅の場所。片田舎。

金刀比羅本平治物語〔1220頃か〕下・常磐六波羅に参る事「義朝の少（おさな）い人々の候ふを、取りいだされ失はるべしと承り、かたはらにしので候ひつれども」

⑥動詞の連体形や格助詞「の」の下に付いて、形式名詞的に用いられ、「あることをしながら、それと並行して」の意を表す。その一方。

小学読本〔1874〕〈榊原・那珂・稲垣〉五「母一人にて紙を商ふ傍らに小銭など両替して生業とせり」

## 【二】（副）

【一】6の転じたもの）あることをしながら、その一方では。かたがた。

花柳春話〔1878～79〕〈織田純一郎訳〕二六「逃亡の策を考へ、側（カタハ）ら両賊の談を聞く」

『時代別国語大辞典 上代編』の「かたはら」の項目では、その語義について、次のように説明している。

①脇腹。片腹の意。

彼大蛇每<sup>レ</sup>頭各有<sup>二</sup>石松<sup>一</sup>。兩<sup>レ</sup>脇有<sup>レ</sup>山、甚可畏矣。（神代紀上）

②かたわら。そのあたり。

骨側有<sup>二</sup>水瓶<sup>一</sup>（靈異記下一話前田本傍訓）

『時代別国語大辞典 室町編』では、「かたはら」の語義について、次のように説明している。

①問題とする空間の、中心部からはずれた一方の端のところ。

循牆トハ道ノマン中ヲアルカズ、道ノカタハラヲヨケテアルク（莊子抄<sup>+</sup>）

②問題とする物や人など対象から、わずかにはずれて隣接したところ。

塾ハ門ノかたわらの宮ゾ（蒙求知抄<sup>下</sup>）

③多く形容動詞として用いられ、偏った一面的なものの見方しかしないさまである意を表す。

紫中つ比よりこのかたのかたはらの好士は、一句のうへに理しられてうるはしきを秀逸とのみ心得（ささめごと<sup>下</sup>）

④助詞「に」を伴って連用修飾語に用いられ、主要な事柄に対して、付随的・副次的なものとして事

がなされるさまを表わす。

始は鍛冶にてありつる者、傍に鞠をすいてけたり（醒睡笑）

<傍に置く>

そのことを重要視しないで、そのまま放置する。

必ズ未証意得ノ者ハ文字言句ニ計り取り合テ、肝要一道ノ義ヲ傍ニ取り置フズト云テ、火ヲ著テクワラ  
リト焼キ払テステラレタ（巨海代抄）

<傍に一す（なす）>

物事を中心をなすはずの主要なところを軽視する。

当代ノ儒者が、道ヲ行ウトヲバ傍ニシテ、文章ヲ専ニシテ、アゲクニ人ニ讒セラレテ身ヲヲ云タゾ（黄  
鳥鉢抄<sub>四</sub>）

『古語大辞典』では、「かたはら」の語義について、次のように説明している。

【「かた」は片、「はし」は端の意味。「ら」は接尾語】

①その物の側面。脇。

両（ふたつ）の一「脇カタハラ」に山あり<書紀・神代上・宝剣出現>

②肋骨。脇腹。

脇カタハラ」の下を刺さる。<金剛波若集験記古点>

③左右に近い辺り。そば。

骨の一に「側カタハラ」水瓶あり。<靈異記・下・訓釈>

④端に片寄った所。

④道路などの端。道端。

わがのぼるは、いとあやふく覚えて、一に寄りて、高欄押さへなどして行くものを。<枕草子・一二  
〇>

⑤片田舎。

これはこの国の一に住む白拍子にて候<謡曲・道成寺>

傍ら寂し

身辺が寂しい。常に傍らにあった（特に共に卧した）人がいやんくなって、もの寂しい。

「げに一しき夜な夜な経にけるも」<源氏・若菜上>

傍ら無し

並ぶものがない。

「初めよりやむごとなき人(=嫡妻)の、傍らも無きやうにてのみ物し給ふめればこそ」<源氏・竹河>

「肋骨。脇腹」の意味の記述が『日本国語大辞典』になく、「片田舎」の意味の記述が『時代別国語大辞典 室町編』にないなど、辞典の間で記述内容の食い違いがあり、また江戸時代の用例がないため、「かたわら」の歴史の変遷を辞典類の記述から正確にたどるのは不可能であるが、おおむね、物の側面→近接空間→近接空間にいる人→周辺部といった順序で、空間的な意味の拡張が江戸時代までに起こっていたと考えられる。文法化の例と言えるのは、『日本国語大辞典』の⑥であり、用例には明治初期のものが挙がっている。そして、これに当たるものが『古語大辞典』にないことから、文法化した例が見られるようになるのは明治に入ってからと考えてよいだろう。

このほか、重要なこととして、『日本国語大辞典』では、⑥からの派生として、副詞用法を認めている。これは明治以降に発生したものである。また、『時代別国語大辞典 室町編』の④には、「主要な事柄に対して、付随的・副次的なものとして事がなされるさまを表わす」とあり、これは、現代語の「かたわら」の意味のルーツと言えるようなものとして、注目される。

#### 4. 近代における「かたわら」の使用状況

ここでは、『日本語歴史コーパス 明治・大正編 I 雑誌』<sup>2</sup>を利用し、近代における「かたわら」の使用状況を見る。

##### 4.1 調査の方法と用例数

用例は、語彙素読みと語彙素で検索をかけて収集した。検索結果の中には、原文表記にはルビや送り仮名がつかない「傍」「側」「脇」「旁」が含まれるが、それらは考察対象から外し、ルビあるいは送り仮名が付き、「かたわら」として特定できる 341 例を考察対象とした。表 1 は『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』から収集した「かたわら」の原文表記別の用例数を示したものである。

<sup>2</sup> 国立国語研究所が先行して公開した『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』『明六雑誌コーパス』『国民之友コーパス』の4つのコーパスに『東洋学芸雑誌』を加えて、『日本語歴史コーパス 明治・大正編』の一部として2016年に公開された。このコーパスに収録された雑誌には小説、評論、紀行文など多種多様な文章が含まれている、執筆者は当時の政治・文学・科学など各界の著名人が多く加わり、読者も学生、成人、女性と広範囲に渡っている。質的にも量的にも近代語の書き言葉の様子を広く捉えることのできる資料といえる。

表1 原文表記別の「かたわら」の用例数

原文表記	用例数	原文表記	用例数
かたはら	16	<sup>かた</sup> 傍はら	2
かたわら	3	傍ら	138
<sup>かたはら</sup> 側	14	傍ラ	6
側ら	9	<sup>かた</sup> 傍ら	1
側ラ	2	<sup>かたは</sup> 傍ら	31
<sup>かたは</sup> 側ら	2	<sup>かたわ</sup> 傍ら	4
<sup>かたはら</sup> 傍	85	旁ら	13
<sup>かたから</sup> 傍	4	旁ラ	2
傍はら	8	<sup>かたは</sup> 旁ら	1

表2は、資料別・作品別の「かたわら」の用例数を示したものである。

表2 作品別・年代別に見る「かたわら」の用例数

刊行年	明六雑誌	東洋 学芸雑誌	国民之友	女学雑誌	女学世界	婦人 倶楽部	太陽
1874	0						
1875	0						
1881		0					
1882		5					
1887			8				
1888			22				
1894				26			
1895				6			78
1901							74
1909					10		34
1917							26
1925						13	39
計	0	5	30	32	10	13	251

明治前期の『明六雑誌』には「かたわら」の用例が見つからなかった。用例が『太陽』に集中しているのは、コーパス中のデータ量が多いからである。

## 4.2 意味による用例分類

以下に行う意味による用例分類には、上代から現代までのすべての用法を取り上げている『日本国語大辞典』を参考にすることにする。

- ① 物の横側。物の脇。
- ② 物や人のそば、近く。
- ③ そば、近くにいる人。
- ④ 道の脇、道端。
- ⑤ 片田舎。
- ⑥ ～するのと並行して、～する一方。
- ⑦ その一方で。

これらの意味の関係については、まず、古い時代に物の側面①から隣接空間②へと意味拡張が起こり、それに続いて、物の側面①から道の側面④へ、隣接空間②から隣接空間に存在する人③や周辺地域⑤へと、さらに意味拡張が起こったものと考えられる。⑥や⑦は、①から⑤に見られる空間的な意味を失い、状況的な意味へと抽象化したものであろう。本稿の調査では、⑤以外のすべての意味での使用がコーパスに見られた。

表3は、『日本国語大辞典』の意味分類を基準として、収集した341例の「かたわら」の用例の意味分類を行ったものである<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> なお、次のような例は、動詞に接続しているが、純粋に位置関係を表しているので、①に分類した。

・かれ等は用水の漲つて流れる縁を通つて、この昔の館の址の草藪に埋められてある傍を掠めて、そしていつも揃つて野良の方へと出掛けて行つた。(『太陽』10「ある僧の奇蹟」田山花袋1917口語)

・其高サ凡て一丈八尺碑の高サ一丈八尺都合三丈六尺巍然として久里濱畔白砂の間に立つ臺石は相摸六ヶ村の産物を用ひ碑石は仙臺より輸入したるもの碑石の表面には「北米合衆國水師提督伯理上陸紀念碑」と大書したる傍ら大勳位侯爵伊藤博文書とあり(『太陽』9「[海内彙報]」\*1901文語)

表3 「かたわら」の意味別・資料別の用例数

	国民 之友	女学 雑誌	女学 世界	東洋 学芸雑誌	婦人 倶楽部	太陽	計
①横側、脇	1	0	0	0	1	12	14
②そば、近く	11	20	7	1	8	118	165
③そば、近くにいる人	0	0	0	0	0	1	1
④道端	0	0	0	0	0	3	3
⑤片田舎	0	0	0	0	0	0	0
⑥～するのと並行して	7	2	1	0	4	54	68
⑦その一方で（副詞）	11	10	2	4	0	63	90

表3から、②「そば、近く」の意味で使用されるものが最も多く、⑥「～するのと並行して」、⑦「その一方で」の意味を表すものがそれに次ぐことがわかる。

次に、意味によって分類したそれぞれの用例が口語と文語のいずれの文体の記事に出現しているかを表4に示す。

表4 「かたわら」の意味別・文体別の用例数

	口語	文語	計
①横側、脇	2	12	14
②そば、近く	80	85	165
③そば、近くにいる人	0	1	1
④道端	1	2	3
⑤片田舎	0	0	0
⑥～するのと並行して	35	33	68
⑦その一方で	17	73	90

表4から、次のようなことがわかる。主要な用法である②⑥⑦のうち、②⑥は、口語体の文章にもそれなりに使用されているが、副詞用法の⑦は、口語体の文章に十分に浸透していない。この用法が現代語に残っていないのは、そのためかもしれない。

#### 4.3 「かたわら」の形態的な特徴

ここでは、「かたわら」の品詞別に形態的な特徴（格・とりたて形式）を考察する。品詞の観点からは、①②③④は名詞、⑥は後置詞または従属接続詞、⑦は副詞と見られる。名詞は多機能であるが、後置詞・従属接続詞や副詞は単機能である。

## 4.3.1 名詞用法の「かたわら」

まず、名詞用法の「かたわら」の格・とりたて形式の分布は表5のようである<sup>4</sup>。

表5 名詞用法の「かたわら」の意味別の格形式の分布

	はだか格	を格	に格	へ格	で格	から格	より格	の格
①横側、脇	8	2	4	0	0	0	0	0
②そば、近く	4	13	90	6	2	3	8	30
③そば、近くにいる人	0	0	1	0	0	0	0	0
④道端	0	0	3	0	0	0	0	0

現代語との関係で問題となるのは、②の用法における、はだか格、に格、で格の関係である。現代語の場所を表す「そば」や「近く」は、はだか格で用いられることはなく（\*駅のそば／近く、住んでいる）、存在の場所を表すに格か（駅の近くに住んでいる）、動作の場所を表すで格（駅の近くで散歩する）を使用しなければならない。一方、近代語では違った面がみられる。

まず、はだか格は、4例のすべてが文語体の記事に見られるものである。

- 1) 乞ふ幸ひに不文を允せ、世人の謂ふが如く露西亞は果して強國なる乎、國を地軸の北方に相し歐亞の大陸に跨がり、覇を宇内列國に揮ひ縦横無盡に切り立て薙ぎ立て傍ら人もなげなる露國の舉動に對しては吾人は將た之を何んとか評す可き、(『太陽』4「露西亞の外交術」藤塚熊太郎 1901 文語)
- 2) 日中と雖ども尚能く素人の眼を眩ますに足る、而して斯業に巧みなるは佛國の長所にて、巴理に於ける「チュイレリー」公園の傍ら、軒を並べ、店を接する多くの金銀寶玉店が、如何に安物を奇麗に飾りて、田舎漢の財を絞りつつあるかは、一ト度巴理を過ぎりしもの知る處にて、(『太陽』8「特別通信 想起漫録 (一)」鈴木東馬 1901 文語)

次に、で格の2例はいずれも口語体のものであり、現代語と同様に動作の場所を表している。

- 3) 彼女のかたはらでは裸馬に乗つた男の子が死んだやうに眠り、薄痘痕のある若い男は彼女を挑むやうな眼付をした。(『太陽』9「青い夜の飛躍—或は招魂祭に於ける小さな歴史—」今東光 1925 口語)
- 4) 一九一八年の夏の初め、シベリアの寒村にも短かい春が訪づれて、百花一時に咲き亂れようと云ふ六月の中頃、エカテリンブルグの郊外のとある教會堂の傍らで、數人の農民たち

<sup>4</sup> 「かたわらなる」のようなコピュラをとる例(7例)は除いている。

が灰の堆積を掻き分けながら、人の骨の灰の中から、碎け散つたくすぶつた緑の石片を掘り出してゐました。(『婦人倶楽部』6「緑玉石祕話」北島利男 1925 口語)

続いて、②の用法の「かたわら」が、に格を取る用例をみると、移動先を表すものは当然に格になるので別として、存在の場所を表すものが37例で、動作の場所を表すものが6例あった。動作の場所を表す、に格の例は、文語体の記事の例が5例で、口語体の記事の例が1例であった。つまり、動作の場所を表すに格の用例は文語体の記事に集中している。

- 5) 此時彼方の襖を透して、人の苦しげに咳する聲聞え、其度に若き女の聲音にて、何やら語り居る氣勢しぬ。さては其處に病夫人の在して、例の嬢も傍に看護すると覺し。(『太陽』3「昭君怨」巖谷小波 1895 文語)

#### 4.3.2 後置詞用法の「かたわら」

名詞用法の「かたわら」の中には、後置詞とみてよいものがある。

- 6) 是等の出漁船は、毎年解氷後より冬季は沿海一帯結氷す九月に至る五ヶ月の漁期間、大抵は胡鹽支那鹽燒酎黄酒、高粱酒等紋緞子、紬布、金巾紡績糸、卷蓆、燐寸、麥粉、雜貨を搭載して來り、採漁の旁ら江口浦頭、若くは島蔭に泊りて、漁夫を相手に船移しに賣買し、農民より米、豆子大豆包米玉蜀黍高粱、牛皮、牛骨、獸皮、蘆葦アンペラ土煤韓人は土炭と云ふ泥炭也等を返荷として買收して去る故に戎船貿易は、夏季漁撈期より秋季穀物出盛時期を、最も盛んなる時期とする。(『太陽』2「表朝鮮沿岸の海賊と密貿易」村田懋磨 1909 口語)
- 7) 高橋某、吉岡某など其の領袖なり。高橋某は既に此地に定住すること二十餘年、運送業の傍はら諸外國商人の代理店を兼ね所有の汽船は隔日に旅順口へ往來しつつあり、吉岡某外數人は、主として此地産の桐材または豆粕を本國へ輸出するを業とす。領事田結紳三郎氏は備中高梁の人、郵便局長高垣徳次氏は秋田の人、其他に諸氏の家族と、醫士、寫眞師等の居留民を合せ、總て未だ五十人に上らず。(『太陽』3「芝罘港」坪谷水哉 1901 文語)

これらの例では、「かたわら」をかざる名詞は「採漁」「運送業」といった活動を表すものであって、空間に存在する物や人ではない。したがって、空間的位置関係の意味にはならず、「～の一方で」「～と並行して」という意味になる。つまり、従属接続詞にきわめて近い意味を表す。この用法は現代語にもあり、基本的にはだか格をとるという点も共通である (30 例)。

なお、次のような、に格をとる例も2例みられたが、「読書と詩」「マコレー論文」といった活動

の対象を表す名詞をうけており、典型的な後置詞用法ではない。

- 8) 私は讀書と詩の傍らに、唯一の娯樂として將棋を研究しましたが、最初は明治八年でした、其頃名人の伊東宗印に就て修行し、次に關澄檢校に學んだものです。檢校は七段でした。此間も或る新聞に、私は將棋の博士だと書てあつたが、決してソんな譯ぢやない。(『太陽』2「表朝鮮沿岸の海賊と密貿易」村田懋磨 1909 口語)
- 9) 何となれば彼等は堯舜政治の下に「ナポレオン、コード」を施し、マコレー論文の側らに、小學流の道德を教へ、孟子の勸農主義を布かんとして、却りて英國經濟派の論を採用し、人民の權理自由を擴張せんと欲して、却りて神種神權説を主張す、其の注文も亦た六ヶ敷からずや、吾人は今茲に折衷論を駁するの暇なし、(『国民之友』11「新保守黨」\*1887 文語)

#### 4.3.3 従属接続詞用法の「かたわら」

先行研究に指摘されているように、現代語の「かたわら」には、「母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた。」(グループ・ジャマシイ)のように、連体成分を受け、「～するそばで」の意を表す従属接続詞的な用法がある。ただし、この用法の「かたわら」は、⑥の用法の「かたわら」とは違って、空間的な意味を強く残しており、従属節と主節の動作の主体が異なるという特徴がある。これは、②の用法の「かたわら」が連体成分として節をとるようになったものと考えられる。だが、今回の調査では、そうした例は見つからなかった。

今回の調査で見つかった従属接続詞用法の「かたわら」の用例は、36例のすべてがはだか格をとり、空間的意味を失って、「～する一方で」「～するのと並行して」といった意味を表す点では、現代語に見られる従属接続詞とほとんど変わらないといえる。以下、いくつか例を挙げる。

- 10) 翁のかういつた様な性格はいたるところに現はれてゐる。話は横道にそれて翁にのみ集中されてゐたが、翁は本會を明治廿一年静岡縣安倍郡安東村に設立した。そして直接出獄人の保護をなす側ら、出獄人に職業を紹介したり、或は特種の伎倆を有するものには、これを場内に於て營ましめたりして、彼等の將來に自活の道を選ばしめる様に訓化したのである。(『太陽』4「我國資産家の社會事業」冷泉生 1925 口語)
- 11) 久榮さんは、一時にこみ上げて來る涙に、しばし言葉もなく、只々夢心地でありました。その筈です。久榮さんにとつてはその一つだけでも深い深い苦心の結晶だつたのです。さう云ふうちにも、久榮さんは『白ばたん』に行くかたはら、屢々遠藤はつ子さんの美容館にも行き、道行く人の髪かたち、身粧ひ、さては化粧法に至るまで細かい觀察をして整容術の工夫を怠りませんでした。(『婦人俱樂部』12「整容大學の創設者 山本久榮女史」鈴木由太郎 1925 口語)

以下では、近代語の「かたわら」と現代語の従属接続詞の「かたわら」の違いとして、動詞の述語形式および動詞の表す出来事のタイプ、主体の同一性について見ていく。

まず、「かたわら」が接続する動詞の述語形式の分布を資料別・年代別に示す。

表6 「かたわら」が接続する動詞の述語形式の分布（資料・年代別）

		国民之友		女学雑誌	女学世界	婦人倶楽部	太陽					計
		1887	1888	1894	1909	1925	1895	1901	1909	1917	1925	
過去形	シ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	シタ	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
	タルノ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	3
非過去形	スル	0	0	1	1	2	1	2	3	6	8	24
	スルノ	1	0	0	0	0	0	3	1	2	1	8
	セントスル	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	計	2	0	1	1	2	1	5	4	8	9	33

この表から分かるように、近代語の「かたわら」には、否定形に接続する例はないが、少数ながら過去形に接続する例がある。一方、先行研究が指摘しているように、現代語の「かたわら」節の動詞にはテンス対立がなく、もっぱら非過去形で使用される。これは「かたわら」が同時性というタクシスの意味を表すため、独立したテンス表示の必要がないからである。近代語でも、非過去形の例がほとんどである。

- 12) 子供が少し大きくなつたら又共に働く考へで、子供を育てる傍ら人の針仕事などをしてゐた、處が出産後四ヶ月を過ぎるともう彼女は二度目の妊娠であつた、一人の子供にさへ困つてゐたのに二人の年子では何をすることも出来ない、彼女は幾度死を思つたか知れなかつた、(『太陽』7「産兒制限を求むる人々」加治時次郎 1925 口語)
- 13) 此言は私を煩悶させた。私は雑誌編輯主任として精勵する傍ら、秘かに船舶史の研究をやつてゐたので、『深さをも有たうとしてゐる』といつたら、『それでは君はきつと僕と別れなければならぬやうになるだらう』といはれた。(『太陽』10「世に知られない桂月氏の一側面」西村醉夢 1925 口語)

次に、過去形の3例をすべて挙げる。これらは、同時性を積極的には表さず、また、主業と副業というような関係も表さない。このような意味で「かたわら」が使われることは現代語ではほとんどなくなっている。現代語なら、「一方で」を使うところであろう。

- 14) 當時伯林にては學士ステリング氏其該博雄辨なる万有哲學を以て盛に日耳曼の少年子弟を薰陶せしが、氏も亦其門に在り其教理は永く腦裡に残刻せり、氏は又日耳曼の文學に通達せし傍ら深く自由の主義に得る所あり、(『国民之友』14「ミカヘル、カトコフの畧傳(一)」\*(訳)/英国通信社1888文語)
- 15) 實に維兠翁の如きは、多方面に非常なる力を盡した傍ら、學術研究には規則正しく、且つ精節にして忠實なる獨逸學者の一人である。(『太陽』1「名士の獨逸觀 醫學博士 金杉英五郎君談」金杉英五郎1909口語)

つづいて、従属接続詞の「かたわら」のうける動詞が表す出来事のタイプについて見る。その多くは、次のような人間の生業や社会的な活動を表すものであり、36例中31例を占める。この用法は現代語と同じである。

- 16) この部屋には、年寄が何やら友禪縮緬の片を膝のうへに擴げてみた。周三が旅行の留守中に、仕事の手傳をしてもらふ傍ら、一身上の相談にも干つてやりたい考で、田舎から呼寄せた女が、聲も立てずに靜かに針を動かしてゐるらしかつた。(『太陽』1「葦」徳田秋声1917口語)
- 17) 寺崎武男——寺崎氏は明治四十年美術學校を卒業して伊太利に遊び爾來十年間、ヴェニス高等商業學校講師として日本語を講ずる傍ら彼地の新古美術を研究したる人なり。日本人にして伊國に十年間滞在したるもの殆んど其例に乏しからむ。(『太陽』2「開戦以來の伊太利」寺崎武男1917文語)

このほか、社会・經濟・政治の情勢を表すものも、5例ばかりみられる。

- 18) 是れが影響を忽ち民間經濟界に波及し、貿易は比年逆勢に逆を重ね、正貨は陸續海外に流出して、資金缺乏、金利騰貴而して事業界は衰頽に傾くの傍ら物價は益々騰貴を來して、左なきだに輸入超過の趨勢を促進し、不振なる財界をして愈不振ならしめたり。(『太陽』4「經濟時評」小松崎筑嶺1901文語)
- 19) 我が移民地たる北米の天、南洋の地及び布哇を見渡すも、其成蹟は餘り良好ならざるのみならず、近來此等の地方より排斥せらるるが如き傾向を有する傍ら、我が内地に於ては、利用すべき森林夥多あるを以て見れば、之を利用するの優れるに若かざるなり。(『太陽』13「帝國の經濟と林業政策」高橋琢也1901文語)
- 20) スの現象は、どふしても政府の擴張事業が、國力に不相當不權衡なることより胚胎したるので、其結果は自然と輸出入に非常なる不平均を來し、從て正貨は陸續海外に流出し、

金融切迫、金利騰貴と云ふ傍ら、一方には政府事業が着々として益々進行するから、通貨の膨脹を來して、民間の購買力を増進し、物價の騰貴を招き、左なきだに不振なる經濟界をして益々不振ならしめました。(『太陽』4「現下の經濟界に對する所見」洪沢栄一 1901 口語)

- 21) 此の頃になつては、氣球の進歩する傍ら、一方に於ては既に飛行器の研究にも着手されつつあつたのである。(『太陽』13「最近歐洲に於ける飛行器界」X Y Z 少佐 1909 口語)
- 22) 今日吾人が見る處、亦唯處女然たる憫べき共和政に外ならざるに非らずや、指環鈕玉、裝容華なりと雖も、腐敗痼疾は深く政治の中心に染み、不義の財富は外皮を金玉にし、而此共和國全洲を通じて巨豪者其王權を恣にするの旁ら、終生衣食に泣奔する丁男婦女あるを見るなり、(『国民之友』1「人の權理 (一)」池本吉治 (訳) / ヘンリー・ジョージ 1887 文語)

現代語では、従属接続詞の「かたわら」(空間的な意味を残すものは除く)がうける動詞は人間の行為を表わすものにはほぼ限られるのに対し、近代語では、動詞の意味の範囲がはるかに広いことが分かる。人間の行為を表す場合は、従属節と主節の出来事の間、主・副の関係が認められるが、その他の例では、そのような関係はなく、二つの状況を対比的に捉えるような意味で使用されている。

最後に、主体の同一性について触れておく。同一主体の例が31例と多かったが、異主体の例も5例あった。この5例は、いずれも上でみた対比的な用法である。この用法は、主体の点でも「一方」と同じ特徴をもつことがわかる。

#### 4.3.4. 副詞用法の「かたわら」

ここでは、現代語にみられない「かたわら」の副詞用法についてみる。副詞であるから格の体系はもたないが、「一に」「一より」の形で副詞として働いていると見なせるものもここで取り上げる。全92例のうち、「一に」は4例、「一より」は1例であった。

副詞用法の「かたわら」は、従属接続詞用法と同じく、「一方で」の意味を表す。この用法の「かたわら」は助辞がつかない点で、はだか格を取った名詞用法と形式的に同じであるが、空間的な意味を表さない点で、名詞用法から区別される。

- 23) 此者たるやアリザリンに反して甚だ酸化し難し然れども其組成を比較すれば其差異は以て酸素の二原子寡きのみ又アリザリンの性質を熟視すれば其酸素二原子は傍ら水素と抱合しハイドロオキシル (HO) となつて現在すること明瞭なり (『東洋学芸雑誌』12「有機物の合成 (二)」松井直吉 1882 文語)

副詞用法の「かたわら」には、従属接続詞に似た働きをするものもある。それは、中止節の後に置かれるものである。このようなものが68例あった。

- 24) 身を以て實行を躰し、事業を以て、無聲の宣傳を爲さんと欲し、密かに全村教育の慨あり。則はち、屋外に札を懸けて、無月謝教授を廣告す。主として、貧兒を教え、傍ら村人の爲めに、書状を認ため、もしくは、其の顧問に應ぜんとする也。(『女学雑誌』6「望月峯吉君」巖本善治 1895 文語)
- 25) 私は是迄人に向つて此事を何遍申したか知れませんが、此度「太陽」編輯者から寄書の需めを受けましたから、此一篇を草して其責を塞ぎ、傍ら同一事を繰り返し言ふ煩を省く事と致しました。(『太陽』9「石器時代遺跡の實踐は人類學上如何なる利益有りや」坪井正五郎 1895 口語)

これは、従属接続詞を副詞として独立させたような用法である。たとえば最初の例は、従属接続詞に転換し、「主として、貧兒を教える傍ら、村人の爲めに、書状を認ため、もしくは、其の顧問に應ぜんとする也。」と書き換えることもできる。

「一に」の形のもは、「並行して」といった時間的な意味を表す。

- 26) 若し初より良法の之を正道に導びくありて又傍らに道德の訓誨の之に及ぶあらば庶幾くは泰西の覆轍を踏まずして止まん歟(『国民之友』19「議員撰擧の弊害預防説」東京の一市民 1888 文語)
- 27) そそれから以前に大勢派出された修業生と一緒になつて稽古を始め、英學は無論傍らにやるし、醫科に付いてはマンスフェルド(和蘭人)といふ人が講釋をして呉れる。(『太陽』2「青年時代の苦學(下)」芳川顯正 1901 口語)

「一より」の形のもは、動作の連鎖を表す。意味的には現代語の「そばから」に等しいが、現代語の「そばから」は「教わるそばから忘れてしまう」のように従属接続詞として使用されるのに対して、近代語コーパスには副詞用法しか見られなかった。

- 28) 然れども此の書や著者が日毎に改進新聞紙上に掲載し所謂「塵事を中心に居て机邊山を爲す執務の間に一時間を費やさずして起草し傍らより刷行したるもの」を編成したるならんことを知れば、吾人は實に著者の筆力の縦横にして、才藻に富むに感心するの外なきなり、(『国民之友』7「新刊小説」\* 1887 文語)

## 5. おわりに

本稿での考察を通じて、近代語における「かたわら」の文法化の状況について、以下のようなことが明らかになった。

- ①近代では、名詞用法が全体の約 54% を占める。当時は実質語としての使用がまだ衰えていない。動詞述語をうけ、従属接続詞化して使われるものは全体の約 11% に留まる。また、現代語にはない副詞用法が全体の約 26% を占めるなど、用法の分布が現代語とは大きく異なる。
- ②近代語において、現代語と同様の従属接続詞用法は完全に成立しているといえる。特に、「主な活動・作業以外の空いた時間に、一方で」という意味を表す用法と同じものが近代語コーパスにも数多く見られる。
- ③ただし、「母が編み物をするかたわらで、女の子は折り紙をして遊んでいた。」のような空間的な意味を残した従属接続詞の用例は見つからなかった。これについては、他の資料も調査する必要がある。
- ④その一方で、「主な活動・作業以外の空いた時間に、一方で」という意味を表す用法以外にも、二つの状況を対比的に捉える用法が広く見られる。後者の用法では、動詞の過去形が見られたり、主節と従属節が異主体になったりする。現代語なら「一方で」を用いるようなところに「かたわら」が用いられていたと考えられる。
- ⑤現代語においては、名詞用法・副詞用法・従属接続詞用法のすべてが近代語に比べて衰退しているといえる。従属接続詞用法では、用法が狭い範囲に固定化し、また空間的な意味を残す用法へと逆行してもいる (③)。「かたわら」の衰退には、文体的な問題と「一方」との役割分担の進行が関係していると思われる。

## 参考文献

- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』 ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』 くろしお出版
- 田中寛 (2010) 『複合辞からみた日本語文法研究』 ひつじ書房
- 村木新次郎 (2005) 「疑似連体節をうける従属接続詞—「かたわら」と「一方(で)」の用法を中心に—」 『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』 5、pp.65-88
- 村木新次郎 (2012) 『日本語の品詞体系とその周辺』 くろしお出版

## <資料>

- 国立国語研究所編 (2019) 『日本語歴史コーパス明治・大正編 I 雑誌』 (中納言バージョン 2.4.4)

〈辞典類〉

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2000-2002) 『日本国語大辞典』 小学館  
上代語辞典編修委員会編 (1967) 『時代別国語大辞典 上代編』 三省堂  
室町時代語辞典編修委員会編 (1985) 『時代別国語大辞典 室町時代編』 三省堂  
中田祝夫ほか (1983) 『古語大辞典』 小学館

